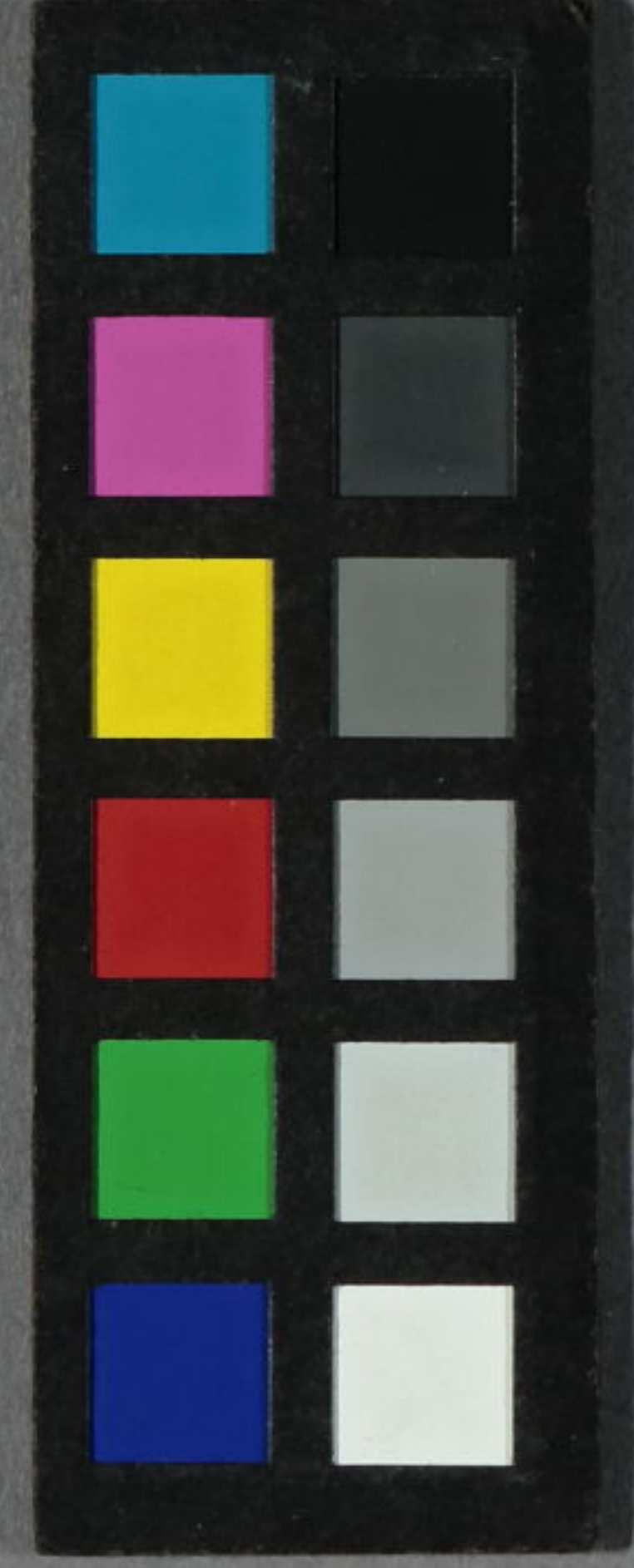


西洋道中膝栗毛

二編

下



西洋道中膝栗毛二編下

東京

假名垣魯文戯著



去程小弥次郎北八の二個の彼縁舎の大不可あき
荷を廣藏を不快しが朝の程方のぞらめよ打て
笑ひの種とあり再春あし不夜を更し晝日遅く
紀おころが廣藏の目かあき知己の支那人を遠
くの仲務んと今朝をきく他出世と噂より物こ
りの後續小絶か通年段の通次郎をそのしそ

西洋道中膝栗毛二編下

建安の城下を彼知此知見物せんと言命ほしつ
 通次郎の形多し至るに一人りの交那人通次郎
 とろち清ひ居るの量るの懇意と名もれば
 志ある人小目礼まればあま 誦 下キニ通せん
 人お礼とるを友人さあつ死 下キニ通せん 祝玉
 物組へあけしところからけ方も市仲とちうとぶら
 つらへんやう志やア福入、通次郎も今あめ人方を
 徳引く意とんとさめやうと思つてゐる知人の南系
 きんが様徳つらの知己サとさうとあつら建の昨日

暑く候と聞いてたづねくさうらうら麻をまへるの
 北どろだく、あけめん、通次郎、トキニ南
 系さん、寿長家の目如度やの若松といふ女郎
 の情人ふとらまてゐる隙海さんといふ人さぐさく
 漢ふるから日本婚あつて、通次郎、おる意氣あか
 け、だらう、常中、案内、人、たのむと、志、あ、さ
 だらう、誦、そのつ、奇、妙、ヲ、ウ、ライ、ト、北、サ、ア、
 登、通、マ、ア、志、づ、る、志、相、入、余、の、若、は、ま、と、我、も、行、く

古今洋果毛二下
 三

おれも坊ウでるる世のさる女どもが後くると是を
 送ひもぐ厄めづらヨ北「そらともく」モシ陳さんむら
 お後ぐひ中やス トとれより何人かをたらしめあらせらとまちあつたの意を ああさまのりく「私
 おとも そのあつたおるものよふめづら 北「ヤ、その家の何高賣ぶらう暖簾よあふ
 書て何りくその顔店々アあんぞも大店とさ 北
 ヲイおやアめんどらしては家が太店と分ッこのご 北
 ても此の店と看板と出さく位おやア枕の

お人足が多勢集ッてもみるんだらう 北「ごらごら
 めくそのよふ一字からくあるのを漬移人からせん
 北「云々」をまらマアアア別頼店といふのぞ日
 中の髪結店と云 北「アアある髪結店が別頼店
 湯屋が洗湯店と云 北「アアある髪結店が別頼店
 せんせんが髪もあきれらマ 北「コウ」北やらの風ハ
 文字の風だららめつる事とをいふとけ「坊を
 送られる世を渡ふよめるありあんだいよとさるら

西洋書毛二下

知をわくととが あつらつらソツトあれふきけ 外岐ダ
 悉イくらヨ 北 イヤちやたまふ口とこと 忠ツく強
 幣小幅をさつせるせとんあらむふの生薬屋の
 青板よまきくある字の何と競の 下レクウ
 阿れう子トあれハ子とせう由 日中の字引あやア
 あんふ字の終ハア何のやア大藤は必の作字だらう
 北 アソく 頁をさしむいづげんふあね人字といふお
 のえ支那から渡つておあやア終くうそれふからの

ト 字引の 日中の字引と分隣の五めと及
 せ 一ヤ字の後この支那からあやアね
 たら物知くらヨ 一ヤ後この知ハ子トあうく
 とするのうガア日中じりだらうがわられハ八百やく
 トあをさあまきとさたかたさる 北 それ小近させあハ平氣
 支那人と通訳那のあをさあふ
 の終ハ那どんととえたてまらる結さあくも連よじ
 るをえせあのう引かしく字備あれ知まをま
 集ハを結那の必の町人女郎 賢のまらう。あや

のろのろ――
 the noise of the sea
 海の音の
 のろのろの音の
 the noise of the sea
 海の音の
 のろのろの音の
 the noise of the sea
 海の音の
 のろのろの音の
 the noise of the sea
 海の音の
 のろのろの音の
 the noise of the sea
 海の音の
 のろのろの音の
 the noise of the sea
 海の音の

毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the
 毛膚人の
 the skin of the

毛膚人

毛膚人



よき人
 志しは
 形おしは
 費句も梅の
 あり
 うね

MSA



魔捕をまらり何ぞててくせえそくせえアタシ
 あまひふんづるあそくかき重命をつけらるとい
 あり當りて遊倒者やアがうこのそくアイタシ
 被さうとて汝はえん一寸そくえんぬ 緋
 利う後入男とせむりしてうらり債へよらるるあん
 外唄が愚いやあヲヤク 大勢唐人多きまらから
 川のある組まで行くまをまをサア告げぬ
 うぢあうてて集りちのあらぬ白ひさ 北
 一ツイとん

あふ野えおあつらひ後入のんごせたえ外唄が
 からうが集りちあつらひは町内とて出来のあ
 たうけ町の自身敷へかき唐年考へ機合ッ
 さら合名の原紙がなるだらうたうの今のら
 西園り赤楊の河岸小畑くある原紙を捜あや
 までお知れらアエシ通次郎さんお若男でもあ
 自身敷まで通 けいこめをのふのけ園やア自身敷
 や唐年考のあやアあぬ けしてあまごのあがぬ

橋のつと日中から海上に百里とありて一とせん
 浮雲をりし痛人のとどめをさひまをとりだけれの上
 ぬをささるのさうらもやうあけと云つたらそあ
 狭く一死の上ぬりし麻を添りやアけ入のぬへ
 何の因も支那と界来りてまてあんみぬ
 金だらうあらアモリ友から博國たぐ成りたる
 通アにさうい事をだ一ある子モミなんみりてを
 云つても英吉利の純順へゆきや毎晩女の

旁から夜這ふ来りて名代りたりされやせん世勝の
 工ぶがあめいやはあらけ國から使船をりらつて
 日中へ帰るあるがらア女運の福人さこのう法次
 さん 一ホニヨ金伴我國はわくせ女あやア好ま
 ぬ人男だつた流や邦國おれををやアアヤ英吉
 利のせんあお婦人が持ちけるうのうそのつらき物ぶ
 色の種おれもけつて通アにさういヤまのか方鼓
 あつたのり 一アにさういヤあきれの現金を男さど

かやきふ後がへつらうきあし子ヲツトむらふ小朱肉

あり北「あいらの脈のあめんごを去年の芳漢を渡

ふ脈の安あでも冥らんどのも志をねくからヨ弥をら

アいらららまを漢の脈が来るもの通「トシ北八さん

脈がひをらしう喰志ねんせチチシ弥「あつとと味

ひき後りむらう北「あつをまのむおサツサト遠志

らう北「あつたつとくわのじやつととると跡決断も通決断

其あり猪子の者方りまうのらんがう弥「コヤク夏の

寤の事まの西洋人ご子通「さうサとの英吉利人

のゆゑの店だととくく家考が薄利丹厄屋と

僕家を書て何のやま外園人も余の秘人を喰て

ある北「あんごと牛の喰のねんを喰とらそい

つら大愛タドレく物知ふ弥「アウ厄女多男ご流汗

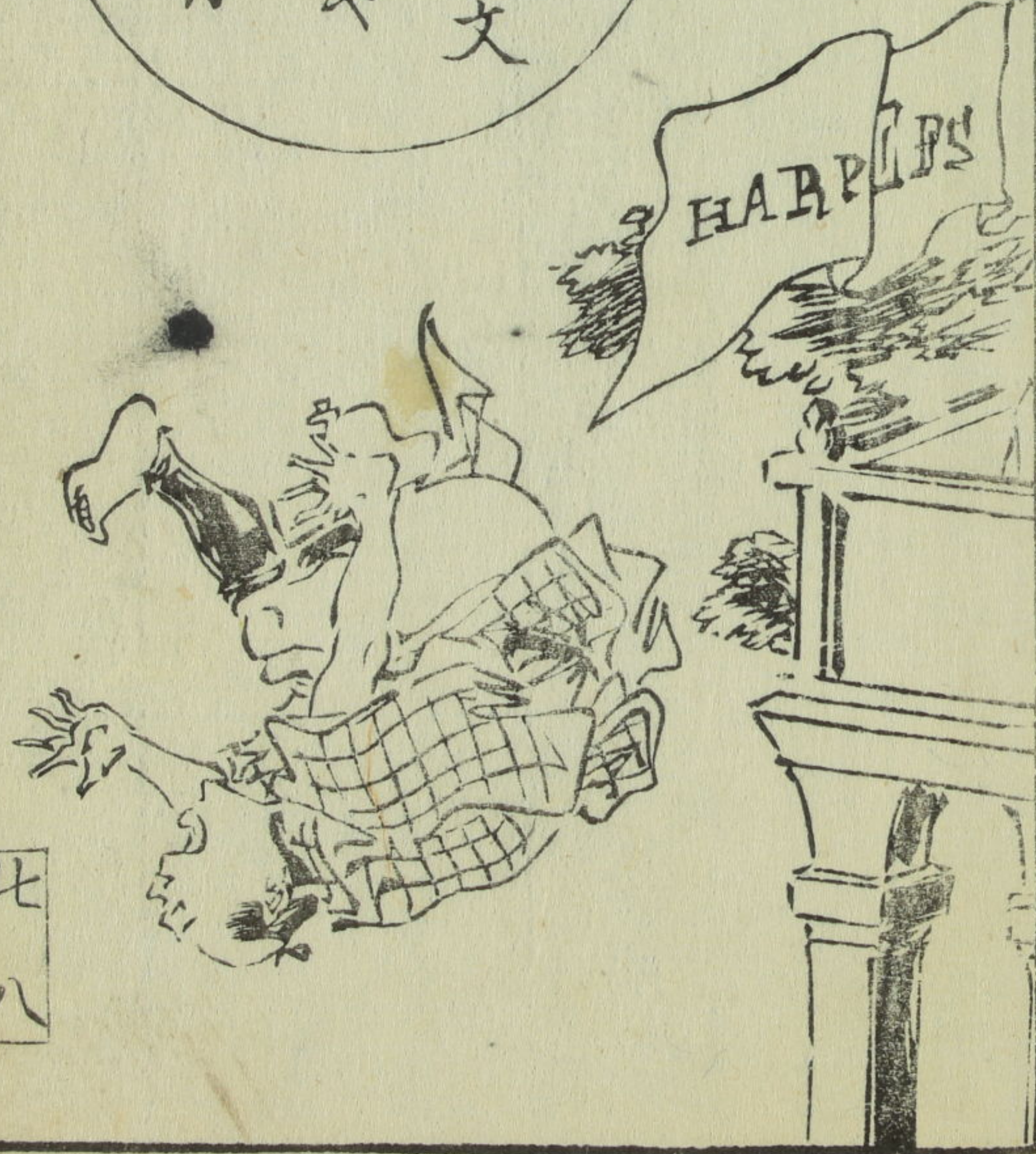
洞を知ぬらんを喰とらる麻あまると云とと

北「ホイきし一書奉り弥「あつたつとくわのじやつととと

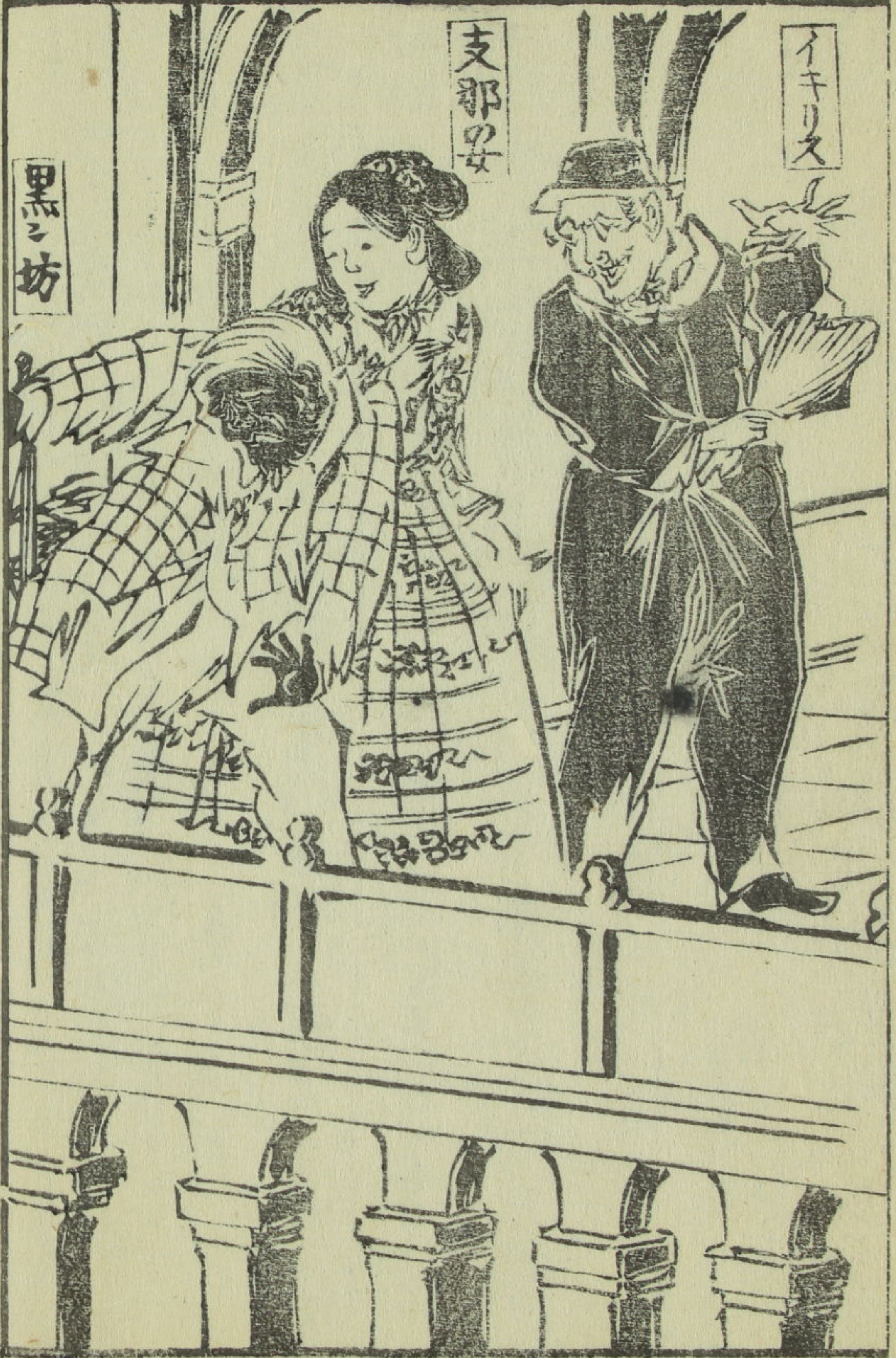
西洋書毛二十一

ナ

藤々 魯文
 属者や
 黒牡丹



北八



支那女

イキリス

黒坊

じふの番西で牛を煮てゐる黒羊のまて死ふ黒羊
 せ晴室から牛を引かへておののあてらう
 〔北〕て同ぢうのピカくひららけく初めて出ッ倉
 せりやア女子ども目を見まらさう 通 それでもアノ
 同業あやア魚の黒イだけガ男のらうのヨ 〔北〕て
 女の黒ン坊をさつツケガやうぞり黒イぜ 〔北〕 〔北〕
 をまける附めやア石膚の房を解いて喰ふと
 りふこと 〔北〕 それを考つてお黒粉とりふとらう 通 〔北〕

とんご三粒を食ふ 〔北〕 フリト 通 えん大使あハ物知
 づらう子孫を指せ入りあきりふめん發を催し
 てきこてたまらぬ 通 フリットらうが通辭の役
 じモシト歌か附とほし 〔北〕 やませう 通 〔北〕
 北八のあまをさつかか入くあゆかかあのかもあつてあのこと 〔北〕
 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕
 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕
 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕
 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕 〔北〕

の...
を...
北八...

図の如き器械あり

手水臺

ウツシ
スタンド

一体此器械ハ西洋人の

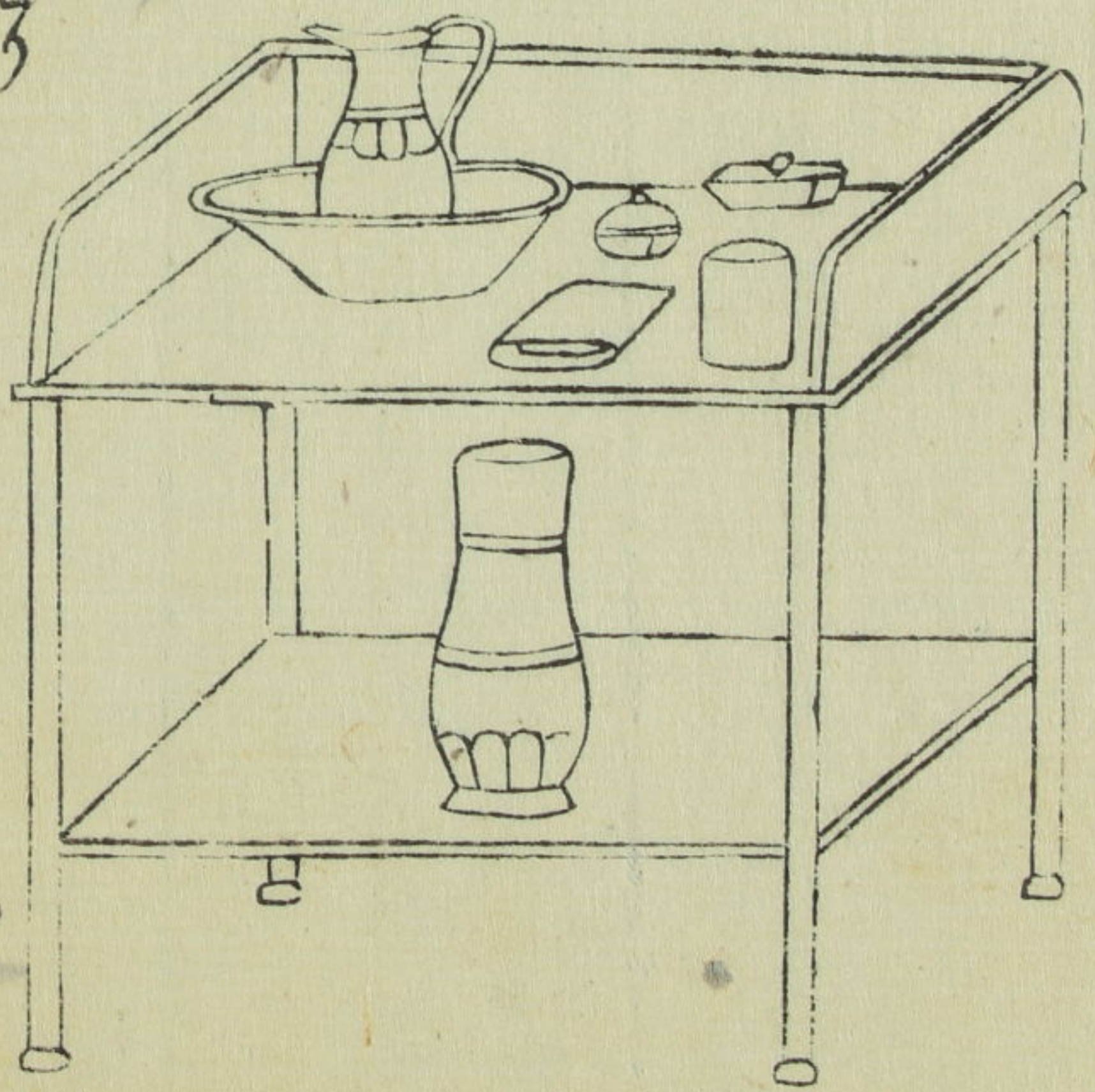
寐間ニある手水鉢の臺

あり茲より片山氏の西洋

衣食住と題号小冊中の

縮圖を依て趣向の一端と

るそのと委くハ彼書ニ記せり



○北八ハ...
が...
か...
え...
く...
さ...
日...
中...
カ...
ホ...
イ...
と...
さ...
北...
ハ...
ハ...

日本胡為大家請尊歩

ト大...
カ...
ホ...
イ...
と...
さ...
北...
ハ...
ハ...

Handwritten text in the upper right section, likely a continuation of the story or a specific chapter heading. It includes several lines of cursive script.

Handwritten text in the middle right section, continuing the narrative. It features dense cursive writing with some small annotations.

Main handwritten text block on the left page, consisting of approximately ten lines of cursive script. It appears to be the primary body of text for this page.



のおどけとる人未かりしが園帝廟の事をまきるとして
 北八が廟の中より半身外へ作向は例まてる遊女をみる
 よりまどなりめりつゝ物うらやまきあがらそのとこへ
 寄つとひ一人ふきとるよりうらやまきをうらやまきにして北八の
 ことと名懸懐中身のみり跡らむとき棄て去けり
 ○まふ跡次郎通に席あつりの若の北八が便所へ
 うつりしあとよ跡うて酒汲か池し結てどもく一向は
 酒り未だれい如何せやと若ふらちよ何じの異人

半切の黒夷若の何とてはしく走來り二人を巻
 て手込めあさん形相あるあぞ物うらやまんと通に郎
 の異人若を制止つゝ英治をゆゑに治方を問ふ
 同伴の男が北八を富家の婢女をとらへて若うぐ
 有る乱指をよとてはしる捕へて殺す連ぬんと
 あらうも裏によう逃げかばけとの同伴のりのが
 おもありとぬの弁お互後の指子を咬いて二人り
 の驚きさめぐと云はるあまふ若らば婢女の衣後を

損ね家内の者を強じて高ひを揚げる傍に金を
 を出せばしと外國流の掛合よどろく若手か
 敷成して呑む酒の癖も醒果もろくの体あそ
 ころをま出さるあそも北八の何方へ迎法しや同伴お
 籠りもろ雑貨をかけ自己の尻をろの親者あて何
 知をぶろろ知るやらん出合がわじてくれんとり
 来し方を尋ぬるよ日の暮る中を出あひまどあそ
 籠者へ戻りしあそんと縁籠屋へりまれば入りそ

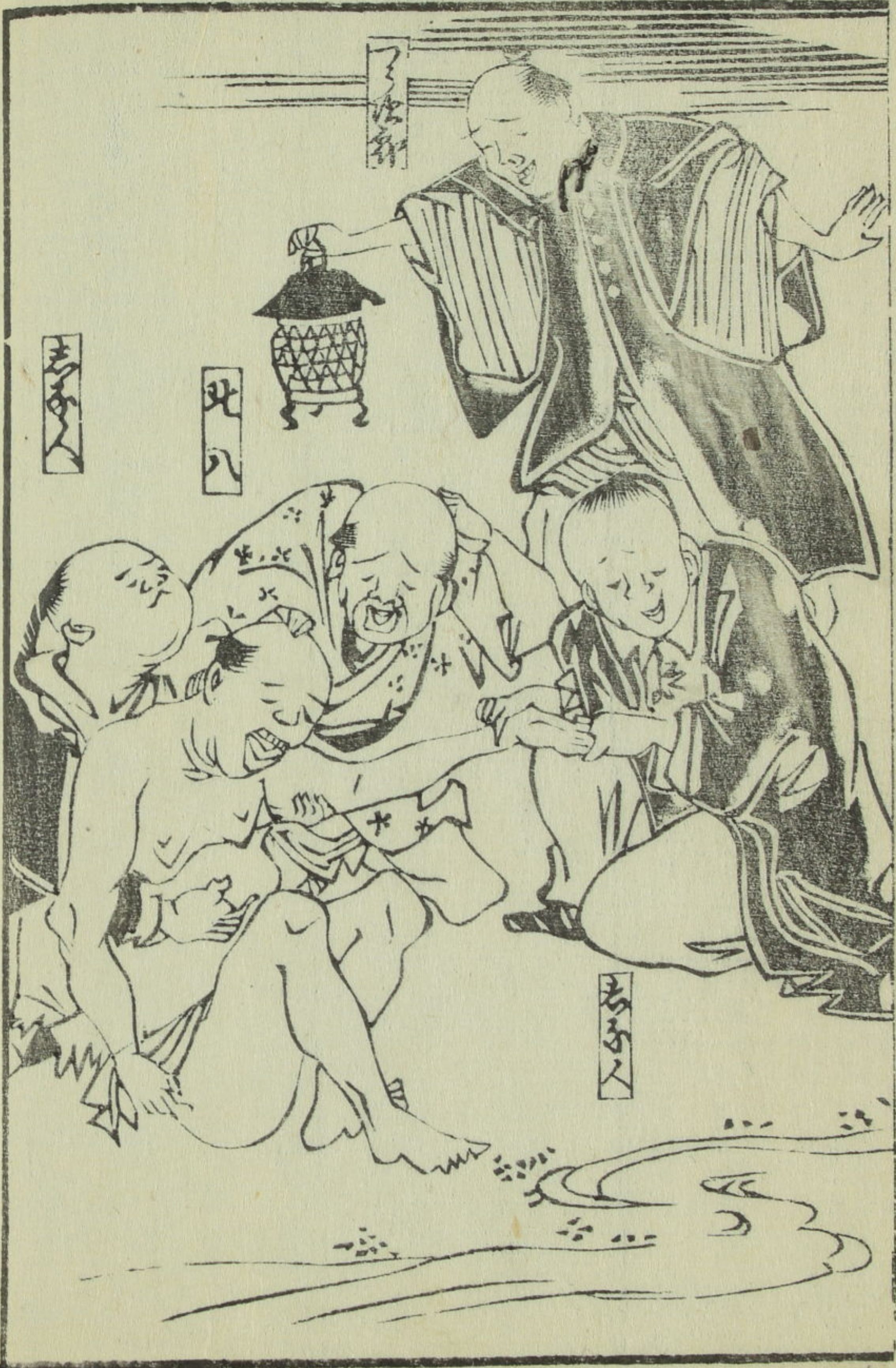
きひどもあどり事をとりのあそをふろろの北八の
 今日のお始末帰くハアと較百里を強したひの
 ことまろろ捨てもあれ後ハ事ハ先刻案内よ程を
 たる疎海ハ三人おとくれゆり来てあそ者よあそくを
 持合せ居るるを備ひ枕打を燈させるほどその余
 縁舎の男を二人を程まろろ嘸んチヤルヌラ
 ちを敵を敵をあそら城下の横町裏通ろを遠道
 とたつてあれどあそらあそらあれされバあそくはあそれ

西洋要毛二下

十八

北八ヤアイ引のトキニ通次さんアノ破家社那の何
 細く移さやアがりらう困ったえんちさごを
 そろサ牛座を近おしこの裏はうらぶとらうら
 物でもコリヤ田舎もち入送エリ込んで物物でも
 つまられこふ遠くねヨ強支那の物ハ金毛丸尾
 白面ごとのらうら化しやうが念がのつて蝟削を蕎
 麦とく喰せたりるの原を空ふとてせせ化走

をする後へあととあやアせむあへのヲ通
 彼奴が多漢を見込してあつるまきさタラビアンの女
 小化くまらうらふるまうこ上眼く體をおいせく
 半死半生ふあてサセの揚巾が不便捕まゆかん
 せて天窓の毛を喰切つてちやんく物主のか番
 別とでもきめらけるだらう物しても危女サ子
 どうか出苦勞あがら各者又頼んで田舎道をモウ
 一過ぶらめてめらうてあくんあせんあめりもかり合



通

あんちきあきぐもつま捕まれのびらうきま

ききあふつのでゆよりめでて人ま那放心あんど唱ちやう家あく

めんやとと云る通さんまろのあゆ房あよあめんから北「モシよ

ろくくあ謝してあくんあせくブルトトガタあトトあ

小まあのあちあらあらあちあんやあり

牛あ唇あくらあひあまあまあ砂あのあ暗あ暗あよ

ろきあ目あをあ聞あてあああくあああきあきあきあきあ

「ヲツトあれも一背あうんじ

から麗のまぶらを籠のあま坂や

このまぶらこそ跡の夕夕馬

初はまぶらとてうち逢ふ籠宿をばしてゆけり

○第一編の英領香港の清碧姫家登橋

のあししとより「セイゴ」に海海の船路雅

風の一回船中の物懐あんど引続きは

板仕の男少洋判を尋ふ

西洋道中膝栗毛二編下巻

東海道中膝栗毛 中本 木曾 膝栗毛 中本 全廿五冊

萬國航海 西洋膝栗毛 中本 奥州道中膝栗毛 中本 全十五冊

亞墨西洋膝栗毛 拾遺 近刻 滑稽言五十三驛 切付 全十冊

東京書林 本石町二丁目 椀屋伊兵衛 椀屋伊三郎 椀屋喜兵衛

